幕末日本のアヘン戦争観

— 古賀侗庵を起点にして —

前 田 勉

アヘン戦争は幕末日本に深刻な対外的危機感をもたらした。政治史的には、その情報が、水野忠邦の主導した天保の改革の諸政策（高島帆の洋式砲術の採用や薪水給与令など）の契機になったことが知られているが、またその思想的影響も大きかった。

「聖賢の国」清^①中華がイギリス^②夷狄に無残にも敗北した、この衝撃的な事実は、それまで懐いてきた中国観・西洋観を大きく揺さぶり、更にはその転換を迫るものであったと言われてきた。周知のように、この転換を体現していた思想家が佐久間象山（^{文化一}一八二一—^{天保元}一八五〇）である。象山は、アヘン戦争の風聞に接した直後には、「唐虞以来礼楽之区、歐羅巴洲の腥穢に、変じ申されまじきとも申難き様子に聞え、扱々嘆はしき義に有^レ之候^③」（加藤水谷宛 天保十三年十月九日）と、清^④中華観に立って慨嘆していたが、すぐに西洋^⑤夷狄の軍事・科学技術の優秀性を認め自ら積極的に学んでいった。確かに象山の転換は際立っている。しかし、象山が「礼楽之区」が汚されるのではないかと憂慮していた時点で既に、イギリスの侵

略行為を非難すると共に、西洋の進んだ軍事・科学技術を摂取せず、軍事的弱体をまねいた清朝の独善的優越意識を批判していた著作があったことは、これまで全く看過されてきた。

本稿はこの埋れていた著作、古賀侗庵の『鴉片釀変記』を取り上げる。後に述べるように『鴉片釀変記』は、アヘン戦争の只中に書かれ、しかもそのアヘン戦争観は幕末日本のそれを方向づけていた。先駆性を高く評価される象山もまた、その影響を受けていたのである。本稿はこの『鴉片釀変記』を起点に幕末日本のアヘン戦争観を点描していくことによって、アヘン戦争が幕末日本に果たした思想史的意義を明らかにしたい。

二

古賀侗庵^⑥（^{天明八}一八二八—^{文化四}一八四七）は、寛政の三博士の一人である古賀精里（^{享和三}一八〇一—^{文化十}一八三三）の三男で、文化十四年（一八一七）精里の没後、昌平翼の御儒者となり、祭酒林述斎のもとで幕府の文教政策の一翼を担った。また侗庵は渡辺華山の蛭社グループの一員として知られているが、華山が海防に関心をもつ遙か以前から、それに心を砕いて

いた。その直接のきっかけになったのが、文化年間のロシアのエト
ロフ島襲撃事件である。伺庵はこの事件に強い衝撃をうけ、『擬極
論時事封事』(伺庵秘集)巻一(文化六年)を著し、西洋の進んだ
大砲・大艦の軍事技術の導入と大船製造禁止令の撤廃を提言した。
更に彼はロシアの情報を収集するために、大槻玄沢らの蘭学者に交
流を求め、その成果として『俄羅斯紀聞』四集や『俄羅斯情形臆度』
を編纂した。天保九年(一八三八)から同十一年にかけて著した『海
防臆測』では、異国船打払令を批判し、またアヘン戦争後のオラン
ダ国王の開国勧告に対しては、開国・交易論の立場からその受け入
れを唱えた(『伺庵六集』巻七 擬論外夷互市封事 弘化元年)。

本稿が着目する『鴉片釀変記』は、天保十二年(一八四二)、ア
ヘン戦争の最中に成ったもので、彼の文集『伺庵六集』に収められ
ている。それは、和蘭風説書・唐風説書の最新情報をもとに、アヘ
ンの伝播に始まり清朝のアヘン対策、アヘン戦争の発端、そして天
保十一年十二月までの経過を叙述している、幕末日本における最も
早いアヘン戦争の報告書だと言ってよからう。

この中でまず注目すべきは、アヘン戦争の性格に関する伺庵の見
解である。天保十一年七月、日本に最初にアヘン戦争の情報をもた
らした和蘭風説書は、そのニュース・ソースが広東発刊の英字新聞
などにあつたため、イギリス側に立つて戦争の発端を次のように伝
えた。

唐国ニ而エゲレス人に無理非道之事共有之候所よりエゲレス国
より唐国に師を出し、エゲレス国は勿論カーフデーホーフ州^州及び
及び印度エゲレス国之領地ニ而も、専兵を揃へ、唐国に仇を報

んが為め之仕組に御座候。

イギリスの出兵理由を清朝の「無理非道」にあるとするこの風説
書に対して、伺庵は、清朝の度重なるアヘン禁輸令にもかかわらず、
イギリスがアヘンを密輸していたことを指摘して次のように言う。

天保庚子(十一年)前田注)七月、和蘭風説書曰、唐国待二英
機黎一多二非理無道之拳一、故英機黎將二出師攻唐、……………
所謂非理無道、即指下清禁二鴉片一之令上も、……………是清直而
英機黎曲、非理無道、实在二英機黎一、而不_レ在_レ清也、……………
…其所謂非理無道、特託也爾、制二戎夷一者、不_レ可_レ不_レ洞_二知
此意_一也、(『鴉片釀変記』)

ここで伺庵が明快に「清は直にして、英機黎は曲なり」と断じ得
た理由は、彼がオランダの情報を鵜呑みにせず、中国の情報と引き
合わせていたためであろうと思われる。例えば、伺庵はイギリスの
「無理無道」の証拠として、アヘンに対するイギリスの国内政策と
対外政策の矛盾をあげる。「太西諸夷、多沾二鴉片於支那一、以殖_レ
利、而於二己国一、則惟許_レ喫_二烟草一、厲_二禁服_二阿片_一」(同右)。
この例証は、天保十一年七月の唐風説書に見えるものである(もと
もとは、吸飲者死刑を提案した黃爵滋やアヘン厳禁の上奏文にある
もの)。この一例から窺われるように、伺庵は中国の情報を勘案す
ることによって、和蘭風説書の欺瞞をあげたのである。

また伺庵が、正義の所在がどちらにあるのかという道義的立場か
ら、アヘン戦争の性格を捉えていたことは注目すべきである。とい
うのは、このようなアヘン戦争観は、藤間生大氏が「幕末の先覚者
はアヘン戦争のことを口にしてはいるが、その勝敗だけを見て、戦

争の性格を問わないし、不正義の戦いであることを指摘している人は、私を知る範囲では少ない¹⁰⁾と述べているように、幕末日本では、必ずしも一般的ではなかったからである。藤間氏は、その数少ない例の一つに、天保十一年九月に幕府に提出された高島秋帆の洋式砲術採用に関する上書に、「その戦争は十分の非理に御座候」とあることをあげている。管見の範囲では、斎藤竹堂^(文政十二・一八三〇)が「鴉片始末」(天保十四年)で、「鴉片之事、曲在^レ英、直在^レ清」と述べ、塩谷岩陰^(文政九・一八二七)が「隔靴論」(安政四年)に、「英師元無名也、故不^レ仇^レ其君、而仇^レ其臣」と言い、また佐久間象山が「天地公共之道理」からイギリスを非難している(ハリスとの折衝案に関する幕府宛上書稿) (安政五年四月)。確かに数は少ないと言えよう。しかも後に述べるが、ここにあげた竹堂・岩陰・象山はいずれも、伺庵の影響をうけているのである。

一般的に言って、幕末日本の多くの人々は、清朝がイギリスの圧倒的な軍事力に敗北した、その現実の勝敗のみに目を向け、それとは次元を異にする道義的視点が欠けていたように思われる(この点は、後に述べる)。換言すれば、勝てば官軍の論理が主流であったと言えよう。その中で、アヘン戦争の只中、イギリスの侵略行為を「非理無道」と非難した伺庵は刮目すべきであろう。

蓋し伺庵がこのような視点をもち得た理由は、彼が朱子学者であったことによる。夙に丸山真男氏が、幕末日本においては、朱子学に内在する「一種の自然法的観念」が華夷観念を転換させ、国家平等観念を導き出すための「論理的媒介」になったと指摘したが、伺庵はまさに朱子学の「理」を西洋を含めた国家相互間を対等平等に

律する道義として読み込んでいた。『海防臆測』の次の一節はそれを端的に示している。

西洋諸国、間有^レ懷^レ虎狼之志^一者、未^レ必^レ不^レ欲^レ侵^レ加乎我^一、而我理直義正、無^レ瑕可^レ指摘^一、則彼慙然内愧、無^レ辞以使^一。其下^一、而衆咸有^レ隨種瑟縮之氣^一、不^レ肯^レ為^レ所用也。(第三十七節)

我が「理直義正」であれば、「虎狼の志」を懐く西洋諸国も、しよげて恥じ入るであろう。この楽天的とも言える認識を支えていたのが、諸国家間を貫く普遍的な「理義」への信念であり、また、その信念こそが『鴉片釀変記』で近視眼的な勝敗に眩惑されず、イギリスの「非理無道」を鋭く非難し得た内的根拠であったと言えよう。

三

ところで、伺庵はイギリスを非難すると共に、軍事的に劣勢に立っていた清朝の弱点をも指摘していた。『鴉片釀変記』の成った時点は、天保十一年六月の舟山列島定海県での清朝の敗北は報告されてはいたが、未だ勝敗の行方は混沌としていた。同年冬の唐風説書は、イギリス国王の第三女を人質にした事件(むろん誤報)を伝え、来夏までには平和になるだろうと楽観的な戦況の見通しさえ述べていた。このような段階で、伺庵はいち早く清朝の弱点に目を向けていたのである。

その一つが西洋情報不足である。定海県での交戦は、清軍がイギリス軍の礼砲を攻撃と誤認したことがきっかけになった、と天保

十一年十二月の唐風説書は伝えた。何庵はこの記事に注目して、空砲という「泰西の俗」を周知徹底させていなかった清朝の失策を指摘する。

またもう一つが海防力の弱体である。

蓋見^二國於瀕海^一、而不^レ修^二船艦火器^一、実為^二防禦之大闕典^一也、(『鴉片變記』)

何庵は清朝の軍事力を宋・明に比べれば優れていると評価しつつも、「猶恨防海之備、未^レ極^二周匝^一耳」(同右)と、海防力の不備を「防禦の大闕典」と指摘した。

更に何庵は、西洋情報不足・海防力の不備をもたらした根底的原因を見ていた。彼は、在留中国人周某(唐風説書を幕府に提出した周藹亭か)が、清朝の防備は長崎より百倍嚴重だから「外夷入寇、不^レ足^レ介意」(同右)と豪語しているということを伝え聞いて次のように言う。

清海防、予未^レ知^下其能有^レ加^三乎我^一以否上、而彼之凶矜乃尔、蓋妄誇^二揚己邦^一、実支那之病根、(同右)

何庵は「支那」の独善的優越意識こそが、西洋情報への無関心を生み、艦船・銃砲の進んだ西洋の軍事技術を撰取することの妨げになっている「病根」であると診断していたのである。

ここで注意すべきは、このような中華意識に基づく「支那」の自大主義への批判は、『鴉片變記』に至って初めて現れたものではなく、何庵の持論であったことである。既に文化十年(一八一〇)に著した『殷鑒論』で、何庵は言う。

唐人、識見窄狭、夜郎自大、以為宇宙之際、決無^下強大富瞻

若^二我齊州^一者上、又未^三始知^二聖人夷夏之弁、因^レ時而発^一、是以抑^二外國^一太過、不^レ比^レ為^二人類多見^一、其自陷^二於夏蟲坎蛙之見^一也、(『何庵初集』卷九)

更に天保九年(一八三八)、アヘン戦争直前の『海防臆測』でも、次のように言う。

自是^二己所^一為、不^二少倭改^一、不^二復思^レ採^二他邦之長^一、……

……支那亦為^二宇内最大之邦^一、然其驕矜實是大疵、(第二十二節) 何庵は、この中華意識によって西洋を禽獸視し、「他邦の長」具体的にはその優れた軍事・科学技術を撰取しようとせず、いたずらに「宇内最大の邦」と自ら誇っている「支那」の独善主義を早くから非難していたのである。

ということ、朱子学者何庵においては、アヘン戦争での清朝の敗北が中国文明の絶対的優越性の神話をうち崩した、という通説は妥当しないわけである。何庵にとってみれば、清朝がその独善的優越意識の故に、早晚、西洋の侵略を受けるという事態は予想されていた。決して晴天の霹靂ではなかったのである。そのため象山が「唐虞以来礼楽之区」が汚されると慨嘆していた時点で、早くも清朝の弱点を冷静に分析し得たのである。

それにしても、何庵はなぜアヘン戦争以前に中華意識批判を展開し得たのであろうか。その思想的契機になったものは何であったのだらうか。ここでは詳しく論じられないが、この問題は、文化年間の対外的危機以来、何庵が蘭学者と親しく交流をもっていたことに関わっていると思われる。

その鍵になるのが中国の呼称である。先に引いた『殷鑒論』では

中国を「齊州」、「海防臆測」「鴉片釀変記」では「支那」と呼んでいたことに注目したい。

周知のように、中国の呼称は近世日本の儒者にとって一つのアポリアであった。中国を世界の中心に中華と認めることは、そのまま日本を夷狄と卑下することを意味していたからである。ここに、礼教文化の普遍性と「神国」の語に極限化する日本の特殊性をめぐり様々な論争が展開されたことは、よく知られている。同庵にとって、この問題は彼の思想形成において重要なテーマであった。

愛知県西尾市立図書館・岩瀬文庫所蔵の「同庵初集」から『同庵六集』までの稿本を中国の呼称に着目して検索してみると、次のような変化を迎えることができる。

中華 ↓ 齊州 ↓ 西土 ↓ 支那

『殷鑒論』著作時の呼称である、「齊州」は中州と同意の語（『爾雅』卷七）。「西土」は『日本書紀』に見える呼称で（例えば大化二年三月条）、聖徳太子の「日出処天子、致書日没処天子」の語に象徴される、日本との平等・対等化を含意する。近世日本では、山崎闇斎が「中華」の呼称を嫌って使った（『秦山集』巻十五）。この同庵の呼称の内、最後に現れ、『鴉片釀変記』でも使われた「支那」に注目すべきである。

「支那」の呼称は、杉田玄白や大槻玄沢らの蘭学者にとって、中国の中華意識に対する批判の常套語であったからである。同庵にロシア情報を提供していた大槻玄沢の『蘭学階梯』序（天明八年刊）には、次のようにある。「支那は一边に僻在せるに、独り中国と称す。驕放みづから限るのみ」²⁰。同庵の「支那」の呼称は、この蘭学者

からの影響だと言つてよからう。『俄羅斯情形臆度』²¹では、「広き世界之内に支那あるハ眇然として黒子の面に着くかことし」（巻坤）と説く同庵に、大槻玄沢は「己カ居ル所ヲ聖人ノ中華ト敖称シ四面ヲ四夷ハ蛮ト賤スルハ井蛙ノ見ナリ」（同右）と応じていた。齊州・西土をはさんで、中華から支那への呼称の変化は、同庵が蘭学者の中華意識批判を受容したことを意味したのである。

朱子学者同庵は、このように蘭学者の目を通して中国を世界のなかで相対化することによって、早くもアヘン戦争以前に中国文明の絶対的優越性の神話から抜け出し、かえつてその独善性を批判し得たのであった。

四

では、同庵のアヘン戦争観は後代にどのような影響を与えたのであろうか。この問題で注目すべきは、斎藤竹堂の『鴉片始末』である。

竹堂は、昌平齋で同庵に師事していた天保十四年（一八四三）に『鴉片始末』一卷を著した。それはアヘン戦争の発端から南京条約締結に至る経過を「簡括」（斎藤拙堂の跋文）な漢文によって叙述し、最後に竹堂自身の「論」を付したもので、幕末日本に広く伝写された。実は、この『鴉片始末』は天保十一年末までの叙述を『鴉片釀変記』に負うばかりか、「論」は師同庵のアヘン戦争観を祖述したものである。

すなわち竹堂は、「鴉片之事、曲在英、直在清」（前出）と述べ、道義の所在を明快に示すと共に、にもかかわらず、清朝が軍事

的にイギリスに敗北した原因を次のように指摘する。

宇宙万国、風土自異、孰夷孰夏、而漢土常以二中夏一自居、侮視海外諸国一、如二大虎猫鼠、冥頑不靈之物一、不知、其機知之敏、器械之精、固有出下于中夏之所也末一嘗議一、而海防之術、范乎不講、

竹堂もまたそれを、西洋を禽獸視しその優れた軍事・科学技術を知らず、海防を講じようとしなかった独善的優越意識＝中華意識に求めている。このようなアヘン戦争観は、前述した何庵のものであることは明瞭である。とするならば、われわれは、『鴉片始末』を媒介にして何庵のアヘン戦争観の幕末日本への影響を定め得るのである。

本節では、何庵のアヘン戦争観の内、清朝の敗北の原因が中華意識にあるとする見解の影響とその思想的意義を考えてみたい。

まずこの点での影響を列挙してみよう。佐久間象山は、竹堂の『鴉片始末』に「敬歎」して跋文を撰した（『跋阿片始末』²²、弘化元年）。そこで象山は、西洋に対応するに当たって、「彼を知る」（『孫子』）ことの緊要性を説いているが、彼の次のようなアヘン戦争観は、その『鴉片始末』に影響されたものであろう。「中国は一前田注）惟只顧己の国のみよき事に心得、外国といへばひたもの輕視し候て、夷狄蛮貊と賤しめ、彼の実事に熟練し、国利をも興し、兵力をも盛にし、火技に妙に、航海に巧なる事、遙に自国の上に出でたるを知らず居候故に、一旦イギリスと乱を構ふるに及で、大敗を引出し、恥辱を全世界に貽し、大に古昔聖賢の体面を破り候事に御座候」（『ハルマ出版に関する藩主宛上書』、嘉永二年二月）。同様の見解は、塩

谷右陰にも見られる。右陰は、アヘン戦争の資料集とも言うべき『阿芙蓉叢聞』²³（弘化四年自序）を編したが、そこに竹堂の『鴉片始末』を収録した（巻五）。そして「論尤切的、中肯綮」と評し、竹堂の「論」、即ち何庵のアヘン戦争観に同意した。その通り右陰は、「夫洋夷知レ彼知己、而清人以レ華自高、不レ務レ索二外蕃之情一」（『右陰存稿』巻四、阿芙蓉叢聞序）と述べ、中国の自尊主義を批判した。また右陰は、安政元年（一八五四）、川路聖謨の要請で箕作阮甫と共に魏源の『海国図志』を翻刻したが、その序でも、「従前漢人以レ華自居、視二外蕃一不啻犬豕一、於二其地地理政治一、懵乎如二瞽瞍摸二器一」（『右陰存稿』巻四、翻采海国図志序）と非難していた。

この他にも、『鴉片始末』との直接の関連は明確ではないが、アヘン戦争での清朝の敗因を中華意識に求める見解は、次のようなものがある。安積良斎（¹⁷⁹²⁻¹⁸⁶⁰）は『洋外紀略』巻下（嘉永元年）に、「今之蛮夷、非二古之蛮夷一也、支那人眼孔如豆、自謂二天地間莫二過二我中国一者上、……而猶不二自悟一、近年又為二暎夷一所謂二焚掠一」と言い、横井小楠（^{文化九-明治六}）も「海外諸国の、往々理を窮め智を開き、仁を施し義を崇び、国富み兵強く、諸夏の亡きが如くならざるを知らず。待つに昔日の夷狄を以てし、蔑視する事禽獸に等しきにより、道光の末年、鴉片の乱により大に英国の為に挫折せられ」（『国是三論』）たと説く。更に福沢諭吉（^{文化五-明治十}）は、「江戸中の爺婆を開国に口説き落し」として『唐人往来』（慶応元年成）を著し、そこでアヘン戦争・アロー号事件での清朝の敗因を、「世間知らずにて、己が国を上もなぐ貴き物の様に心得て、更らに他国の風に見習ひ改革することを知らざる、己惚の病」にあ

ると指摘していた。

伺庵に淵源すると思われる、以上列挙した開明的な思想家のアーヘン戦争観は、清朝の敗因を中華意識Ⅱ「己愆の病」にあるとする点で共通する。ところで、このような認識は幕末日本でどのような思想的意義をもっていたのだろうか。ここでは、「神州」「皇国」を高唱した所謂日本型華夷論者のアーヘン戦争観と対比して考えてみよう。というのは、伺庵らの「己愆の病」批判は、皇統の一系性と武威を根拠に日本が世界の中心に位置すると説く、日本型華夷論者に向けられていたと思われるからである。

佐藤信淵(明和六年ー享和三年)は、アーヘン戦争以前、「皇大御国は大地の最初に成れる国にして世界万国の根本」(『混同秘策』文政六年成)と説き、世界制覇を夢想していた。しかしその彼も、アーヘン戦争での清朝の敗北に強い衝撃をうけた。竹堂の『鴉片始末』を下敷きにして書いた『水陸戦法録』(嘉永元年)には、「夷狄ノ中華ヲ取ルニ無人ノ境ニ入ルカ如ク、僅兩三年ノ間ニ数多ノ雄鎮ヲ奪ヒ取ラレテ、却テ貢ヲ納ルニ至ルトハ天地開闢以来未曾有ノ珍事ナリ、予甚タ此ヲ驚ウセリ」とあり、その衝撃のほどが察せられよう。そのためか、アーヘン戦争後、西洋列強に対抗するために日清提携論を唱えるようになったことはよく知られている。では信淵は清朝の敗因をどう見ていたのか。「英吉利亞の清國に寇せしは、阿片烟の故あり、且又文弱にして武備の無きを採り得たるを以てなり」(『防海余論』弘化四年)。彼はそれを「文弱」清朝の軍備の弱体に求めた上で、軍事的教訓として、海岸に造営した砲台の無力さと大艦の必要性を導き出した(『水陸戦法録』)。そして、「今夫清國既に其民を糜爛せり。

此を覆車の鑑として、本邦の武備を嚴重にすべ」(『新製小艇放大銃法』嘉永元年)きことを説いた。

また帆足万里(天明七年ー享和三年)も、「近来清人、尹夷纜の軍勢に困みしも、大煩の用に拙きゆゑなり」(『東潜夫論』弘化元年)、「本邦清人皆舟艦の制拙なく、水戦の備なきを能知るゆゑ、先年魯西亜人の蝦夷を乱ふし、尹夷、清朝の舟山を乱防せし如く不埒の働をなすなり」(同右)と述べ、清朝の敗因を大砲・大艦の軍備の弱体にあると見なし、その轍を踏まないよう、「本邦も早砲術を習ひ戦法を改め給べきことなり。否ば必清人の敗あるべし」(同右)と説いた。そして、そのような「舟艦、器械具らば、西洋と水戦しても必勝べきなり」(同右)と説き、西洋列強の軍事力に対抗し得るとした。

信淵・万里が銃砲・艦船の物理的軍事力の増強を求めたのに対して、清朝の敗因を軍事力の弱体にあると認識する点では等しいが、専ら軍事力を支える精神Ⅱ士気に着目したのが、鳥居權蔵(文化元年ー明治七年)と大橋訥庵(文政元年ー文治三年)である。蛮社の獄に暗躍したことで知られる目付鳥居權蔵は、先に見た高島秋帆の洋式砲術採用の上書に対する答申で、「唐國広東の地騒乱の次第も、畢竟、唐國も二百余年の泰平にて、文華のみに流れ、武備の廢弛の処、イギリス國は常々争戦に練熟仕りおり候やにつき、唐國敗亡の事にこれあるべき也。敢えて火砲の利鈍によるばかりとも存せられず」と述べ、緊急の課題は洋式砲術の採用ではなく、「輕薄の士風一変」であると説いている。

また狂信的な攘夷論者訥庵は清朝の敗因を洋学盛行による民心の離反にあるとする。「満清ノ敗績シテ、英夷ニ醜辱ヲ受タルコトハ、

洋学洋貨ノ行ハレテ、人心ヲ蠹蝕セシニ由レルナレバ、是ゾ洋学ノ悪ムベキ、最第一ノ明鑑ナリ」(『關邪小言』卷二)。そしてこの認識に立って、「近年、満清ノ将士ノ輩、英夷ヲ輕蔑シテ、其伎倆ヲ審ニセズ、一旦邊釁ノ興ルニ及デ、防畫果シテ宜キヲ失ヒ、敗虜ヲ致シ和議ヲ講シテ、終天ノ鉅恥ヲ貽セシモ、全ク西洋ノ形勢ニ暗ク、彼ヲ知ザルニ由レルナレバ、是ゾ近キ股鑿ナラズヤ」(同右)と西洋の軍事技術の優秀性を説く洋学者を、かえて「禍源」を知らないものと非難した。

前述した信淵・万里が必ずしも西洋の軍事技術の摂取を否定しなかつたのに対して、耀蔵・訥庵はその技術を支える精神を含めて全否定した。その点で両者は一見すると対照的だが、アヘン戦争での清朝の敗因を軍事力の弱体に求め、西洋列強に対抗するために、物理的、精神的の違ひはあるが、軍備の充実を求める点で等しい。しかもその充実を図って、「神州」「皇国」の武威を世界に輝かすべきだと唱えた点でも共通する。換言すれば、日本が世界の中心に位置するという信念に関する限り相等しいのである。

先に見た阿庵らの中華意識批判は、清朝ばかりではなく、このよ
うな日本型華夷論者に向けられていた。彼らは、日本型華夷論者の
ようにアヘン戦争での清朝の敗因を単に軍事力の弱体に見るのでは
なく、それをまねいた思惟・態度、即ち独善的な中華意識(「己惚
の病」に求めた。阿庵が、日本は「抑亦自貴而卑隣邦一之失、頗
近似西土」(『阿庵五集』卷六、天保八年)すると指摘していた
ように、それは他ならぬ日本自身の宿痼でもあった。その意味で、
阿庵らにとってアヘン戦争は「唇齒輔車の国」(『鴉片釀變記』と

して対岸の火災ではなかつたのである。

五

ところで、阿庵のアヘン戦争観の後代への影響という点で、もう
一つ見逃せない問題がある。それは、阿庵が道義的視点から「是清
直而英機黎曲、非理無道、实在英機黎、而不_レ在_レ清也」(前出)
と批判し、正義の所在を明快に示していたことに関わっている。先
に触れたようにこのような視点は、阿庵の説を受けたと思われる竹
堂・宥陰・象山には見られたが、幕末日本において主流とはならな
かつた。その中で、阿庵が道義的立場を堅持し得た内的根拠には、
朱子学の「一種の自然法的觀念」が与かっているだろうことを論じ
た。それはともかく、道義的視点からアヘン戦争を見ていた阿庵に
は、興味ある見解が生まれているのである。

阿庵の詩集『古心堂詩稿』に、「読清義士檄文探韻」(弘化元年)
という七言律詩がある。

南宋和親休漫論

清於英虜似兒孫

纒余義士強人意

誓掃驕胡酬主恩

壯氣橫秋吞_二峰海_一

精忠如_レ鉄貫_二乾坤_一

滿腔熱血豪端瀉

読罷敵鬪激_二竹軒_一

ここで言う「清義士檄文」は、一八四二年、南京条約締結後、広

州府学明倫堂に各郷紳士の名で揭示された「全粵義士義民公檄」であろう。この檄文は中国全土に広く流布し、各地の民衆の抗英運動を刺激したと言われているが、伺庵はこれを見て強い共感をもったのである。清朝政府が投降路線に傾いていくなかで、一八四一年の広東三元里における民衆の反英闘争に代表される抗英運動は、中国近代史における反侵略闘争の嚆矢と位置づけられているが、伺庵はその抗英運動の闘士を精忠の「義士」と評価していたのである。

この点、南京条約締結後の抗英運動を「愚民」の所為としてしか映らなかつた佐藤信淵と鮮やかな対照をなしている。「清国の愚民等一統に怨み懃み、密に英吉利人を殺すこと数度に及べり。此も亦清国の政治蔽肅ならざるの失策なり」(『存華挫狄論』巻五 嘉永二年序)。ここでは、むしろ「愚民」の抵抗運動を抑圧できなかった清朝政府の「失策」が批判されていた。信淵には、侵略される側からの発想がないことは明らかであろう。アヘン戦争以前には、世界制覇を夢想していた信淵には、そもそも侵略行為自体を否定する道義的視点が欠落していたのである。これに対して、侵略行為の「非理無道」性を批判する伺庵には、イギリスの侵略に抵抗した中国の民衆を精忠の「義士」と称え、その正当性を評価する注目すべき見解が生まれていた。

中国の抗英運動への共感を示している著作としては、太平記風の軍記物調で叙述されたアヘン戦争記である、嶺田楓江(文筆^三一^四一^五)の『海外新話』(嘉永二年刊)が知られている。⁴⁰しかし幕末日本においては、そうした共感は必ずしも主流になつたわけではなかつた。その中で、伺庵の道義的視点を継ぐ人々には、確かにそれが共有さ

れていた。

斎藤竹堂は、「粵東義勇檄」を書写し(稿本『竹堂文集』⁴¹)、またアヘン戦争の際、上海防衛の要衝呉淞の砲台を守り自殺した老提督陳化成を詠じた詩を集めた『表忠崇義集』に序を撰した(『統竹堂文鈔』巻上)。更に塩谷岩陰は、『阿芙蓉彙聞』巻六に抗英闘争の檄文を収めて次のように言う。

詩曰、吾其懲而懲^二後患^一、清人蓋懲矣、然知^レ所^レ懲者、多在^二艸莽之民^一、而廟堂猶如^レ偷^レ安、觀^三於粵東檄文、平夷論說、与^二蘇廷魁之疏^一、可^二以觀^一矣、肉食者鄙、古今之通患也、

この侵略に抵抗する「艸莽の民」への共感は、また後に草莽崛起論を唱えることになる吉田松陰(文筆^三一^四一^五)のなかにも認めることができる。松陰は、嘉永三年(一八五〇)九月の九州旅行の際、平戸で魏源の『聖武記附録』と岩陰の『阿芙蓉彙聞』を読んでいるが、それより以前の嘉永元年、伺庵が称えた檄文に跋文を書いて次のように言っていた。

已而得^二義勇檄文^一読^レ之、辞氣慷慨激烈、令^二人奮発^一焉、因又嘆曰、清豈無^レ人哉、(『未焚稿』書粵東義勇檄文後)

勿論、反英抵抗「義士」への共感が伺庵と松陰にあったと言っても、その政治的立場は同一ではない。しかしそれにしても、伺庵のアヘン戦争観が松陰の草莽崛起論に至る可能性を内包していたことは注意すべきである。

六

以上、幕末日本のアヘン戦争観を古賀伺庵を起点に辿ってきた。

本稿が何庵のアヘン戦争観を起点としたのは、それが最も早く書かれたという時間的理由ばかりではなく、何よりその内容が後代のアヘン戦争観を方向づける傑出したものであったからである。この点についてはもう少し見ておこう。

すなわち何庵は、イギリスの「非理無道」を非難すると共に、道義的には「直」であるにもかかわらず敗退した清朝の軍事力の弱体、及びそれをもたらした中国人の独善的優越意識を批判した。彼のアヘン戦争観が卓越していたのは、このように理念的道義と現実的軍事力の一方の視点に偏らず、その両者の緊張を孕んでいたためであろうと思われる。

アヘン戦争後、箕作省吾訳著『坤輿図識』（弘化二年刊）のために書いた序文は、この道義と力との緊張関係をよく示している。何庵は、そこで対外政策の二つの型を提示して言う。

国_二於_レ両間_一者林々矣、或_レ確然自守、養_レ士字_レ民、使_三國勢如_二金甌之無缺_一、或_レ遠略是事、務_二貿易_一、重_二交際_一、敵國有_レ變、襲_レ而取_レ之、二者判然殊趨、確然自守者崇義也、寡欲也、遠略是事者貪淋也、殘暴也、其優劣任直奚待_二乎言_一、（『何庵六集』）

卷九 坤輿図識序

何庵は、「自守」の国と「遠略」の国の二つの型を示し、前者を「崇義」「寡欲」、後者を「貪淋」「殘暴」と評し道義の観点から前者の優位を説き、「遠略」の国、換言すれば西洋列強の膨張主義を否定する。だが何庵は、一方で現実的情勢を客観的に洞察して言う。

然_レ確然自守者、間或不_レ鏡、而遠略是事者往々盛強、無_二他故_一焉、遠略是事者傾_二竭智力_一、厥氣不_レ撓、攻城水城試_二之_一実

用_一而諳熟、此其鋒所_二以_レ不_レ易_レ撓也、予嘗諦_三察_二方國情形_一、降_二乎目今_一、則不_レ縮_二隣交_一、不_レ修_二辺防_一、而確然自守、有_二斷不_レ可_レ為者_一、（同右）

「自守」の国は沈滞しているのに対して、西洋列強はその旺盛な活力に支えられ盛強である。現時点の世界情勢を見れば、「確然自守」して孤立することは不可能だ。ではどうすればよいのか。

蓋必有_レ電_三征_二外夷之勢_一、然後可_レ退_二保_一一國_一、有_レ威_二懾敵人之略_一、然後可_レ申_二固_一明約_一、（同右）

何庵は潜勢力としての軍事力を充実すべきだと説く。それは侵略のためではなく、あくまで自衛のためのものである。ここには示されてはいないが、具体的には西洋の優れた軍事技術を撰取するために交易し、軍事力を充実させることを提言していたのである（『何庵六集』巻八 答千住某）。アヘン戦争後の弘化元年（一八四四）、清朝の敗北をふまえて、開国を勧めてきたオランダ国書に対して、何庵はそのような立場から、それを受け入れ西洋との交易を主張したのであった（『何庵六集』巻七 擬論外夷互市封事）。何庵にとってアヘン戦争は、一刻も早い開国を促す契機だったのである。

最後に残された問題がある。それは、現実の幕府の外交政策担当者のアヘン戦争観である。今、わたくしにはこの問題を全面的に論ずる用意はないが、ここでは一つの例を提示しておく。

周知のようにペリー来航後の外交政策決定に際して、アヘン戦争での清朝の敗北は、「股鑑」「前車の覆」として幕閣の人々に想起された。例えば、徳川斉昭「十条五事建議書」（嘉永六年七月十日）に「近くは清朝鴉片烟の乱、前車の覆轍に候」とあり、また「間部

詮勝上申書」には、「英・仏等の軍艦渡来、自然混雑し、無抛兵端を開、万一清国の覆轍を踏候様の儀有之候ては、憂患今日に十倍致し、汚辱を後代に伝へ候」(安政五年十月二十四日)とある。清朝の二の舞を避けることが、幕閣の共通認識だったのである。

ここで注目すべきは、山鹿素水(？—^{安政四})である。山鹿流兵学の大家素水は、ベリー来航後の安政期の幕閣に一定の影響力があつたと推定できるからである。素水の門人丹波綾部藩主九鬼隆都は、安政二年(一八五五)幕府の設立した講武所の総裁となり、そこでは、山鹿流兵学が採用された。また素水は『月の光』(嘉永元年成)という経世論を著しているが、それは、長野義言と共に井伊直弼の信任を得ていた宇都木六之丞の命によって書かれたものである。少なくとも素水は、井伊大老に影響を与え得る位置にいたことは確かである。この素水のアヘン戦争観はどのようなものであったのか。

ステニ清国ノ騒乱ハ無体ニ手強ク、手荒キ所置ヲナセシヨリ乱機ヲ生シ、暎夷ハ本ヨリ好マサルノ戦争ナリト雖、乱入スルニ及ンテハ、大ニ破レテ嘲ヲ全世界ニ受、大國ノ恥辱ヲ晒スハ前車ノ戒メ也。事ハ暴ニ失シテ寛ニハ失スルト寡ナシ。

『海備全策』巻五 嘉永元年)

素水は、清朝の敗因を「無体ニ手強ク、手荒キ所置」に求める。この「前車ノ戒」から導き出される対応策は、戦端を開く口実を与えないための「寛」なる処置、具体的には一時的に開国を受け入れ、その間に軍事を充実させ、軍備を整った時点で再度「鎖国」することであった。これが日本型華夷論者素水の言う「世界比類ナキ神州ノ武徳ヲ穢サムルノ思慮」(同右巻一)なのである。

ここには、イギリスの侵略を非難する道義的視点も、また「世界比類ナキ神州」の独善を自省する姿勢もなく、ただひたすら「神州ノ武徳」を穢さず保とうとする領土的体面があるだけである。この素水に窺えると思われる現実の幕閣のアヘン戦争観、ひいてはその対外観こそが、何庵が批判してやまなかったものなのである。

注

(1) 佐藤昌介『洋学史研究序説』(岩波書店 一九六四)、藤田寛『天保の改革』(吉川弘文館 一九八九) 参照。

(2) 植手通有「幕末における対外観の転回」(『日本近代思想の形成』岩波書店 一九七四) 参照。

(3) 『渡邊華山 高野長英 佐久間象山 横井小楠 橋本左内』(日本思想大系五五 岩波書店) 三二七頁。

(4) 幕末日本へのアヘン戦争の思想的影響について論じたものに、増田涉『西学東漸と中国事情』(岩波書店 一九七八)、藤間生大『近現代東アジア世界の形成』(春秋社 一九七七)、芳賀登『阿片戦争・太平天国・日本』(『中国近現代史の諸問題』田中正美先生退官記念論集) 国書刊行会 一九八四)、王暎秋著・小島晋治監訳『アヘン戦争から辛亥革命』(東方書店 一九九一)がある。増田氏の労作は文献を渉猟している点で、藤間氏の研究は東アジア世界のなかでの位置づけ、問題意識の設定において資する所が大きかった。

(5) 何庵研究には、梅澤秀夫「近世後期の朱子学と海防論—古賀精里・何庵の場合」(近代研究会編『幕末維新の日本』山川出

版社 一九八一)、拙稿「古賀侗庵の世界認識」(『季刊日本思想史』近刊)参照。本稿は前稿と重なる部分がある。

(6) 佐藤前掲書二〇一頁。

(7) アヘン戦争情報に二系統があったことについては、佐藤前掲書・加藤祐三『黒船前後の世界』(岩波書店 一九八五)参照。侗庵は両者を総合判断していたのである。

(8) 『和蘭風説書集成』巻下(吉川弘文館 一九七九)第二四八号。

(9) 愛知県西尾市立図書館・岩瀬文庫所蔵『侗庵六集』巻四。岩瀬文庫所蔵の『侗庵文集』六十冊は『侗庵初集』から『六集』までの稿本で、侗庵自身の朱墨による訂正・削除の箇所が認められる。本稿では句読点・返点を適宜つけた。『鴉片釀変記』の引用は以下同様。

(10) 藤間前掲書六二頁。

(11) 『陸軍歴史』巻一(『勝海舟全集』巻一五)。

(12) 岩瀬文庫所蔵。写本一冊。

(13) 『日本儒林叢書』第四冊。

(14) 前掲思想大系、二九六頁。

(15) 丸山真男「近代日本思想史における国家理性の問題(一)」(『展望』一九四九年一月号)。

(16) 梅澤前掲論文参照。

(17) 『侗庵五集』巻十、天保十年。

(18) 同右巻八、天保九年。

(19) 前掲拙稿参照。

(20) 『洋学 上』(日本思想大系六四)三二七頁。

(21) 宮内庁書陵部所蔵。写本。

(22) 『象山全集』巻一。

(23) 前掲思想大系、二八四頁。

(24) 名古屋蓬左文庫所蔵。写本。

(25) 愛知教育大学附属図書館所蔵。

(26) 東北大学附属図書館・狩野文庫所蔵。写本。

(27) 前掲思想大系、四四九頁。

(28) 『福沢論吉選集』巻一。

(29) 荒野泰典『近世日本と東アジア』(東京大学出版会 一九八

八)参照。

(30) 『佐藤信淵武学集』巻上(岩波書店 一九四二)一八七頁。

(31) 川越重昌『兵学者佐藤信淵』(鶴書房 一九四三)五一四頁。

(32) 前掲武学集、三三一頁。

(33) 同右、六〇一頁。

(34) 岩波文庫(一九四二)七七頁。

(35) 前掲『陸軍歴史』巻一。

(36) 『明治文化全集』巻一五、七八頁。

(37) 同右、七五頁。

(38) 岩瀬文庫所蔵。写本。

(39) 前掲武学集、五〇三頁。

(40) 藤間前掲書六三頁参照。

(41) 宮城県立図書館所蔵。写本。

(42) 山口県教育会編『吉田松陰全集』巻一、三三七頁。

- (43) 『幕末政治論集』（日本思想大系五六）一〇頁。齊昭のプレイン会沢正志斎は、アヘン戦争を見て、魏源の『聖武記』巻一四の一節を引照しながら、「是今時亦各国以倡邪教為術」（『下学適言』巻七）と『新論』以来の自説を繰り返している。
- (44) 同右、一〇七頁。
- (45) 東北大学附属図書館・狩野文庫所蔵。
- (46) 住田正一編『日本海防史料叢書』巻一、二七五頁。
- (47) 同右、一七七頁。

（愛知教育大学助教授）